

親業教育としての家庭科教員養成教育の課題 —家庭教育に関する園長・主任対象調査を中心に—

Issues in Parents Education in Pre-service Training in
Home Economics:
Analyzing Warnings from Early Childhood Teachers

甲斐純子 堀雅子 秋永優子 北野幸子

S. Kai

M. Hori

Y. Akinaga

S. Kitano

家政教育講座

(平成21年9月30日受理)

抄録

The Central Education Council (2005) reported that children are down skilling in fundamental living habits, emotional intelligence, morality and sense of discipline, motor ability and motivation for learning. Though parent and family education have been focused in home economic education, current rapid changes in family and children resulted in the need to improve child rearing education more in home economics to solve family crises and children's developmental crises. This study analyzes how parents are rearing their children, through questionnaire to 8 early childhood teachers. The study also asks what is needed for home economic teachers and what teacher preparing course should teach for students to become home economic teachers. As the result the lack of parents' fundamental knowledge in child rearing, such as in wearing, cooking, developing living habits, build better human relationships and discipline were made clear. It was also suggested that the parents themselves have problems in living habits and social skills. The early childhood teachers strongly suggest that home economic teachers need high morality and deep love in children. It was also suggested that the more and more opportunity for university students to visit early childhood care and education institutions and meet and communicate with real children.

Key Words: parent education, home education, child rearing, early childhood care and education

1. はじめに

家庭機能の低下, 蔓延する子育て不安, 増加あるいは顕在化し続ける児童虐待, 家庭の崩壊等々, 子育てにかかわる社会問題が指摘され続けている。子どもに目を向けると, 2005年1月に中央教育審議会から出された「子どもを取り巻く環境の変

化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について—子どもの最善の利益のために幼児教育を考える—(答申)」が示唆するように, 「基本的な生活習慣や態度が身についていない, 他者とのかかわりが苦手である, 自制心や耐性, 規範意識が十分に育っていない, 運動能力が低下している」等の課題が

指摘されている。

これらの問題を解決するためにも、現在子育て中の家庭の支援のみならず、将来の家庭を築く児童・生徒を対象とした、家庭科における親業教育が益々重要であることは、疑う余地もないであろう。しかし、一方で家庭問題の多様化・増加に伴い、家庭支援、親業教育のニーズが高まっているにもかかわらず、他方で家庭科教育と専門教員の縮減がみられる。ここで、親業教育を担い家庭科教師の養成教育の課題を検討することは重要であると考えられる。

家庭科の教員養成課程において親業教育は主に保育学の分野が携わってきた。家庭科保育教育でなされる親業教育とは、理念中心の親性準備性や、性と生命の問題、ジェンダーの教育との関わりが強く（天富・加藤 1999；伊藤 2003；等）、実践は乳幼児との触れあい体験が重視されている（中村・松本 1998）。この度の中学校学習指導要領の改訂で乳幼児とのふれあい体験は必修化されたが、その体験の多くは一過性である。家庭科教師の養成においては、より継続的な乳幼児とのふれあいや、より具体的な子育てに関わる知識と技術そしてその活用能力の育成が必要であることが伺える。少子化に伴い、乳幼児や乳幼児を子育てしている親子とふれあう機会が減少している現在の児童・生徒を指導するための家庭科教師の使命は、益々高まりつつあると考える。しかし、例えば、福岡教育大学の家庭科教員の養成課程の学生に目を向けると、教員養成課程の学生そのものの、乳幼児とのふれあいや子育て中の親と接していないことが明らかにである（福岡教育大学家政教育講座 2009）。

よって本研究では、子育て不安の最も高い時期である乳幼児を子育てしている親に、日頃最も長く接していると予測される幼稚園・保育所の園長・主任を対象に、保護者の課題を問い、親業教育としての家庭科教員養成教育の課題を明らかにしたい。

家庭科教育の課題については、現在の児童生徒、保護者、家庭科教諭対象の調査はあるが、幼稚園や保育所の保育者に現在の家庭教育の課題を聞き、調査し家庭科教員養成教育に反映させようとしたものは、狭見ではない。

本論文では、衣生活・食生活、生活リズムといった生活とより密接した、家庭科保育分野の課題を明らかにするために、今まさに子育て最中の保護者と接している幼稚園・保育所の園長や主任・主任経験者を対象に、その課題を調査する。幼稚園・

保育所の園長を対象とした理由は、保護者と日々接しその課題を目の当たりにしている当事者であること、また、加えて、育児不安の多くは就学前の子育てにかかわるものであることによる。

2. 家庭教育に関する保育者対象調査

2-1. 方法

調査は、自由記述式質問紙のより実施した。

対象：幼稚園保育園の園長 3 名、副園長 1 名、主任 2 名、元主任 2 名を対象に実施した。対象者の保育者歴は、31 年が 1 名、28 年が 2 名、24 年が 3 名、20 年が 1 名、16 年が 1 名である。

実施期間：2009 年 8 月、9 月

質問項目：（1）「今日の家庭教育の課題について」と「園の子どもたちから見える保護者の姿について」以下の 1）から 6）の小項目について記載してもらった（表 1 参照）。また、（2）小・中・高等学校の家庭科の親業教育において必要だと思うことについて、さらには、（3）福岡教育大学の家庭科教師の養成教育に望むことについて、意見聴取した。

表 1 「保護者の姿について」の質問項目

1)衣生活について:着替え、手ふき、温度調節等
2)食生活について:朝食、間食、食事時間、マナー、栄養等
3)生活時間について:早寝、早起き、規則正しさ等
4)メディアとのかかわりについて:テレビ、携帯等
5)人間関係について:親子関係、友だち関係、集団生活、社会性等
6)その他、基本的な生活習慣について:衛生、危険、認知等

2-2. 結果と考察

自由記述式の質問紙の結果を以下に紹介する。

表 2 衣生活について

まだおむつのままでなかなか家庭でトイレトレーニングができていない。冬場は特に厚着が多く、自分自身で着替えが出来るように寝ができていない。
子どもに手をかけすぎて、自分でできない子どもが多い。(着替え等)子どもに汗をかかせたいので、今までクーラーを入れていなかったが、子どもは、ほとんどクーラーのある環境で生活している。クーラーを入れてほしいとの要望あり。
おおもね良好です。雑巾の寄付してもらった時、自分で縫って提出すると市販品を購入して提出する人にわかるが、後者の理由で、縫うのが面倒なのか、技術がないのか、時間がいないのか、理由は分からない。
着衣を選ぶ際に機能性よりもおしゃれ・流行・見た目などが重視されている。「汗を取る、肩を冷やさないためにキヤミールより綿の袖付きシャツを」「遊具にひっきり危険なので、ぶら下がっている飾りや紐の多い物は避ける」といった細やかな注意をわざわざ差し上げないと理解してもらえない。着脱しやすい物を子どもに、と言う意識が薄い。冬場は厚着傾向。過保護と言うよりも風邪を引いて休まれると困るからよつだ。身だしなみを整える意識がだんだんなくなってきている。
全体的に、自ら進んでできる子は少ないです。特に温度調節は難しく、自分で暑さ寒さにあわせることは年長児になってもできない子どもが多いです。
前日に着替えさせた洋服で次の日も登園させる保護者がいる。保育園で貸した洋服を着て登園するさせる保護者がいる。
冷暖房機器が普及され、夏冬も過ごしやすくなっていますが、やはり自然の空気を肌で感じる事が一番だと思っています。その中で、夏でもTシャツ一枚でよい所を、必ず肌着を着せていたり、冬は厚着をするなど、温度調節がしにくいような状態になっていると思います。
着脱しやすいものを着ている。汗が出て着替えを面倒がる。親が準備したものを着ている。

表2は、衣生活について今日の家庭教育の課題についての回答をまとめたものである。トイレトレーニングができていないこと、体温調節ができない様子が指摘されている。クーラーなどの空調の完備された環境よりも、自然な環境の中で季節を感じ、汗をかいたりすることの必要性が指摘されているが、保護者にこれに関する知識が保護者に不足してことが伺える。

表3は、食生活についての回答をまとめたものである。朝食は採っているととしても、その食事の内容について、大きな課題があることが明らかになった。菓子パンだけ、バナナだけ、スナック菓子だけ、といったことが指摘されている。また食事のマナーについては保護者自身が身につけていないことも指摘されている。実際に食生活を自立して自ら培う力を保護者自身が身につける必要があると考える。

表3 食生活について

朝食がまともに摂れている家庭が激減。(菓子パンだけ、バナナだけが増えた。)お箸の持ち方やお茶碗のかかえ方など寝ができていない。
朝食はほとんど食べているようだが、内容は菓子パン等が多いようだ。おやつを与えずで、食事が入らない子どもも多い。保護者の悩みとして、食が細い、好き嫌いを等が多い。
朝食を食べてこない園児は10パーセント程度。間食、食事時間等子どもの指導ができていない家庭も10パーセント程度。子どもの食物に関する好き嫌いに関して、幼稚園であまり強く矯正を指導することを好まない保護者がある。しかし嫌いなものを食べることができるようになると非常に喜ぶので、意識はあり、無関心ではない。
乱れていることは社会全般で言われているが、その通りのことが保育園で見られている。朝食抜き・インスタントやレトルトの増加・外食化・嗜好の偏り・遊び食べなど、きりが無いほど。我が園では長時間延長保育や夜間保育対象児に夕食を提供しているため、家族団らんや保護者による食事場面のしつけの機会を減らしていると思われ、このままでいいのかと不安に思う。保護者は家事育児の手抜きができると喜んであることも逆に不安。
バス通園の子どもが増えたためか、食事をせずに登園してくる子どもが増えています。また、ミルクだけや簡単なもののみ食べてくる、といった感じの子が増えています。朝から、おなかすいたと言って気分が悪い子どももいます。マナーについては、幼稚園は3歳までの育児は各家庭でするので、それぞれの癖などがありマナーはバラバラです。統一して正しいマナーを伝えていき身につくには時間がかかります。
朝食を食べながら登園する子どもの中に、スナック菓子を食べながら登園する子どもがいる。朝食を作らず、栄養面や体のことを考えていない。椅子に座って給食やおやつを食べる時に、「ひざ」を立てて食べる子どもも多い。なぜ「ひざ」を立てるか質問すると、「ひざもしるとよ！」と返事が返ってきた。
遠くまでおため、朝早くから登園する子どもなどは、朝食の時間をしっかりとれているか心配です。また、給食時間中のマナー(大きな声でおしゃべりしながら、時間内に食べ終わらない、姿勢が悪いことなど)も気になります。
朝食は食べているようですが、メニューとしては菓子パン、ジュースなどを車内で飲食している子どももいます。食事中によく席を立つ。

表4は、生活時間についての回答をまとめたものである。夜更かしの問題がいずれからも指摘されており、課題の大きさが伺える。保護者の就労時間ともかかわり、個々の家庭の課題のみならず、就労形態や職場文化の見直しについても広く家庭科教師の養成課程で考える機会を提供する必要があると考えられる。

表4 生活時間について

夜更かしが年齢が下がる程ひどい。3才児10時以降以降がピーク。4～5才児は9時台がピーク。早起きが出来ない。いつもバスの時間に遅れるなど目立つ。
親の生活に合わせて、遅く寝ている子どもが多い。働く母親が増えているので、夜9時前に寝かせるにはかなり負担があるようだ。
睡眠不足の子どもが10パーセント程度。両親と触れ合う時間が夜の遅い時間に偏るため。
2)で回答したことと同様に、延長・夜間の保育を実施する中で、生活リズムの乱れ(遅寝・遅起)を助長させているのではと思う。就労の保障と子どもの育ちとを、天秤にはかけられるはずもないけれども、両者を均等に見る視点で考えられなければならないのではと痛感する。
ながら生活が多いようで、規則正しさはあまりないように思います。
0歳児でも、24時近くになる子どもがいる。保護者(大人)の時間に子どもを合わせている。
小さい子どもでも、父親の遅い帰宅に合わせて就寝する子もいたりして、遅くまで起きていていうことを聞くことがあります。
遅寝、早起きが多いように思う。 週末は家族でゆっくり過ごすためか登園時間が遅い。

表4は、メディアとのかかわりについての回答をまとめたものである。テレビ・ビデオ・DVD 漬けの状態が指摘されている。携帯が使える乳幼児が増えていることは、携帯電話の体裁をしたオモチャが良く売られていることから明らかである。親子で一緒に料理などの家事をすること、直接触れあうこと、一緒に絵本を読むことなどが減少していることが分かる。

表5 メディアとのかかわりについて

DVD・ビデオづけ。1日1時間以内は1割程度。2時間以上がほとんどで、中には4～5時間以上も1割いる。 絵本の読み聞かせを推進しているが、毎日努力して、一応習慣づけているのは3割弱しかない。
テレビはよく見ているように感じる。携帯も普段の生活に溶け込んでいるので、子どもに対する影響が心配だ。(避けて通れないので正しく利用することを啓発したい。)
幼稚園児でも親の携帯を使うことができる。家庭での時間の使い方については想像の域を出ないが、テレビの時間を制限している家庭は少ないだろう。
自分自身もそうだけれど、テレビや携帯電話は生活の中で必須となってしまった。だから、保護者にも全くダメとは言えない。しかし、四六時中ならならテレビやラジオ・オーディオがかかっているのは、人の話が聞けない子に育っているのではないかと危惧する。また、授乳中のテレビ視聴や携帯使用はやめてと伝えている。お迎えに保育園へ入ってくる際に携帯をしながらという人も増えた。
回答なし
自分が忙しい時に、テレビやビデオを子どもに見せている保護者がいる。ゲームを子どもに買っている保護者が多い。
家に帰ると、家事をする間にテレビを観ていることも多く聞かれます。大きくなると、家事のお手伝いなども一緒に過ごす時間として、有効に使ってほしいです。
0、1才児に、携帯を持つと耳にあててうなずく姿が見られる。レンタルのVD、ビデオをよく観ている。テレビだけでは足りない。(大人の利用があるからではないか。)

表6は、人間関係についての回答をまとめたものである。社会性が乏しい子どもと保護者の様子が指摘されている。集団遊びができなくなってきていることが指摘されており、人間関係能力の低下が指摘される。言葉遣いや人の気持ちを思いやる態度の教育能力が親業教育に必要であろう。「子どもの好きなようにさせるのが愛情と思われる方もいらっしゃるようで」とあるように、「しつけ」についての理念、方法と技術を家庭科

教育において実施する必要があると考える。

表6 人間関係について

人との関わりが苦手で希薄になっている。メールはするが、肉声で言葉は交わせない同志が目立って多くなり、言葉遣いもタメ口を先生に対して平気になり、マイペースでわがままな自己心な人が増えてきた。トラブルが多く発生する。役員さんには極端になりたがらない。
核家族の中で育っている、または、近所に遊ぶ友達が少ないなどの影響のためか、小さな集団を作りたがるような傾向を感じる。一人親家庭も増えてきたので、対応に苦慮することもある。
ほぼ良好。子育て放棄まではいかないが、配慮に欠ける家庭がないわけではない。
4)にも関係するが、攻撃性・じじめ・冷やかしか・やさしなどが増えているのはメディアの影響も少なくはないのではと感じる。さらに、今の親世代がバブル期の裕福な世の中で育ち、自己中心的な考え方が多い。親子共に社会のルールや常識が欠如しており、決まりを守る意識が薄い。子どもの中にも、高齢者を敬う・親や先生を慕ったり尊敬したりする・弱者をいたわる・相手を思いやるといった感情が育っていない。伝えようとしても響かない。
社会性が乏しい子は年々多くなっています。親自身が集団が苦手で社会性が乏しい方が多いように思います。
家では親の言うことを聞く「おこさん」で、保育園では話を聞かなかつたり、友達とのトラブルが多い子がいる。
集団の中で生活している時、ふと一人離れて遊んでいる子もいます。集団に慣れにくかったり、できる我慢が出来なくなったり、自分の気持ちを声に出せずに暴力的になってしまう子もいるようです。保護者の方も、子どもの好きなようにさせるのが愛情と思われている方もいらっしゃるようで、耐性が弱い子もいます。
自分中心の子が多い。他人の思いを受け止めることが苦手で、些細なことで衝突がおきる。

表7 その他、基本的な生活習慣について

予防接種を受けていない子が増加している。(母子手帳の)管理も怪しい。熱があるのに平気で登園させたり、なかなか連絡が取れず、迎えに来ない人も増えた。道を歩くときにも手をつながないで、子どもが走り回って他人の迷惑になり危ない場面でも注意をしない。
園においては、不衛生さを感じる子どもは少ない。今年入園した子どもの親で、異常に嘔吐を嫌悪する保護者がいたが、今のところトラブルはない。
ほぼ良好。
基本的な生活習慣全般については、子ども自らが自然に会得する、あるいは、保育園などの就学前児童の施設、または学校で指導してくれるものと認識している。親が当然家庭で躾けるべき内容だと思っていない人が多い。
回答なし
爪を切っていない保護者がいる。保育園で切ってもらうことが当たり前と思っているのかも…?
インフルエンザの流行により、朝夕の登降園時にアルコール消毒を親子ですらしてらっしゃる姿がよく見られるようになりました。基本的な生活習慣は、園(クラス)からのお便りなどでお知らせして、意識を高く持たせていくようにしています。
身の回りの片づけが苦手である。やれる年齢でも面倒がる。忘れ物が多い。なくなってもあまり気にならないようである。衣服(着替え用)は、親のコーディネートで1組ずつ入れてある家庭も少なくない。(こだわりがある。)

表7は、その他、基本的な生活習慣についての回答をまとめたものである。「親が当然家庭で躾けるべき内容だと思っていない人が多い」と指摘されているが、基本的な生活習慣は家庭生活の中で培われるものであるという、家庭科保育の基礎が保護者に浸透していないことが伺われる。予防接種の未接種、交通安全、爪切り、忘れ物等きわめて基本的なことについてまで、保護者に親としての知識と技能が定着していない。家庭科教育の大きな課題であると考えられる。

表8 親業教育に必要なと思うことについて

まず、命の尊厳や愛することとはどういうことかを認識させる必要がある。親としての資格試験を設けたら良いと思うくらいに、親業教育が必要な時代になっている。自分自身の親や祖父母に感謝する心が根柢ないと、平気で子どもを虐待したり、プレッシャーを与えたり、ほったらかしにしたりするように感じる。
命の大切さを徹底して教えてほしい。小・中・高で、赤ちゃんと触れる機会をもっと増やすことが必要では。赤ちゃんと幼児に触れ合う機会を増やす。生物との触れ合い、特に繁殖の経験を増やす。社会の仕組みの疑似体験。経営者と労働者それぞれの立場の疑似体験。起業の疑似体験。
小・中学校で行われている「職場体験学習」の機会が貴重だと思う。体験は何よりも勝る。衛生・安全面などから受け入れの難しさも現実にはあるが、保育園での「子育て体験」を家庭科の授業に盛り込むことにより、親を疑似体験する中で自分を育ててくれた親の立場になってみることもできるのではないだろうか。
子どもに寄り添うということとはどうゆうことなのか、子どもの心を知るにはどう親が寄り添うことがいいのか。
自尊感情が芽生えるような教育。 子どもの「心」が育つ教育。 自分を愛し、他人も愛せる気持ちが育つ教育。
子育ては、楽しいものなのだというを考えてほしいと思います。愛情を持って接すれば、子どもは必ず応えてくれると思います。
体験をし、学ぶことが大切だと思う。身に付いたことは、忘れにくいと思う。

表8は、小・中・高等学校の家庭科の親業教育において必要だと思うことについての回答をまとめたものである。愛情や子どもに寄り添うことといった意見が4件、命の尊厳についての教育の必要性を挙げたものが2件あった。また実際に乳幼児とふれあう経験をする事の重要性が指摘されている。

表9 福岡教育大学の家庭科教師の養成教育に望むことについて

核家族で育っている学生が大多数と思われるが、幼稚園・保育所や孤児院あるいは、老人ホーム等になるべく回数多く訪問し、介護や援助の実習を入れて、教える立場になった時に、実感を持って、家族のあり方やパートナーシップや自分自身の心の在り方も問われる仕事なので、単に技術や技能を教えるだけでなく、生き方のお手本を示せる教師に育ててほしい。
時代の変化にやわらかく対応できる教師像を望みます。
保育園、幼稚園にできるだけ頻繁に出かけて、子育ての実体験を増やしてほしい。教育実習の目的や方法などの改良。子育て中の保護者との意見交換等の時間を作る。宗像市なら「ふらこっ子」やコミュニティーの子育て支援の手伝いに参加したら、かなり正直な意見を聞くことができるのではないかと。社会の変化と教育内容の整合性分析。家庭の経営と社会の仕組みについて知ること(所得税と年末調整・確定申告、社会保険・年金・労働保険、クレジットカードや銀行との付き合い方。)近所づきあいや町内とのかかわり、行政とのかかわり。
学歴が重視される世の中で、入試必須教科が偏重され、音楽や家庭科などの教科が軽視される。保育士もそうであるが、社会に認められ専門職として育っていくと思われる。「家庭」という、人にとって重要なものを、多方面から作り守り形成していく基礎の勉強が家庭科であり、入試には入らなくても、人間生活にはなくてはならない大切なものだよ、と自覚されるよう養成していただきたい。自分の仕事に誇りと責任を持って行うことができれば、その中身を更に深めようと努力する原動力になりうるし、楽しく充実して遂行することができると思う。
家庭科教師は理論的は強いが、実践は弱いと思う。経験不足だと思います。
専門分野だけを教えるのではなく、「心」の教育ができる教師を育成してほしい。一人ひとりの生徒を大切にでき、その子に合った援助ができる教師になってほしいです。
回答なし
回答なし

表9は、福岡教育大学の家庭科教師の養成教育に望むことについての回答をまとめたものである。実際に子どもとふれあうなどして、子どもを知ること、実践力を培うこと、人間性豊かで「心」温

かな教師を養成することが期待されていることが分かった。

3. 親業教育の必要性と改善への提案

3-1. 衣生活・清潔と関連して

3-1-1. 幼児期の生理的特徴と衣服

衣服は、子どもの体温調節を補助する役割を持つ。さらに、毎日着用するものであるから、長期間にわたって身体に影響を与えられられる。衣服に関連した、子どもの生理的特徴を踏まえた衣生活への提言は次のとおりである。

①体温調節

ヒトは、外気温の変化に対して常に一定の体温を保とうとする体温調節機能を有する。末梢血管反応（手足の血管の拡張・収縮）による暑さ寒さへの適応能力は、乳幼児期後半の5歳位でほぼ大人と同じになる。従って、5歳頃から子どもが自分で衣服を利用して調節することが可能である。暑くなったら衣服を脱ぐ、寒くなったら着るということを、子どもが自分で判断して出来るように導く必要がある。

②暑熱および寒冷馴化能力

ヒトには暑さ寒さに適応する能力が備わっている。しかしながら、暑さ寒さに曝されなければ、その能力を発揮し、高めていくことはできない。

ヒトは暑さに曝されると、放熱を促進しようとして手足の血管を拡張して皮膚温を上昇させ、それでも足りない時は発汗する。短期の暑熱馴化能力が高まると、発汗が素早く多量におこり、耐暑能力が増す。汗は500万個あるといわれる汗腺からでるが、この汗腺には能動汗腺と不能汗腺があり、汗は能動汗腺からしかでない。つまり、能動汗腺が多いほど、汗を素早く大量にかくことができ、日本人は平均228万個と多い方であるという。この汗腺の能動化は、出生から2歳半程度までに曝される温熱環境により左右されるようで、この時期に暑さに曝して汗を多量にかく必要がある。従って、暑熱馴化能力を高めるためには、夏季のクーラーの使用は極力抑えて汗をかかせ、汗をかいた衣服はこまめに取り替えるようにする必要がある。

一方、ヒトは寒さに曝されると、手足の血管を収縮して皮膚温を下降させ、外気温との温度差を少なくして放熱を抑制しようとする。この血管収縮が素早くおこなわれるようになると、耐寒能力が増す。しかしながら、常に厚着をしていると手足の血管が収縮する必要がないため、いざ寒さに曝された時には速やかに収縮することができない。

血管収縮に時間がかかるため、その間に放熱量が上昇し（外気温と皮膚温の差が大きい）、体温調節のバランスが崩れやすくなる。従って、寒冷馴化能力を高めるためには、子どもの健康状態をよく見ながら厚着を避けて、冬季はなるべく薄着で過ごさせる必要がある。

③サーカディアンリズム（概日リズム）

ヒトは、体温、睡眠、ホルモンの分泌などにサーカディアンリズムを持っている。このリズムは、例えば体温の場合、起床直前が最も低く、起床後上昇、午後に最も高くなり就寝前に低下し（日較差約1℃）、約24時間で繰り返される。これが乱れるとリズム障害などを引き起こすことがある。ヒトのサーカディアンリズムが正常に刻まれるためには、起床・就寝および食事などを決まった時間定め、規則正しい生活習慣を身につけさせる必要がある。これには、衣生活では、生活の場に応じた衣服に着替えることが有効である。例えば、起床して寝衣（パジャマ等）→日常着→運動着→日常着→休養着→寝衣に着替えて就寝等、着る衣服と生活活動を一致させて規則正しい生活習慣を身につけさせるのである。

3-1-2. 衣服の安全性に関する問題点

子どもの衣服の安全性を考える場合、以下のような問題点が認められる。(斉藤・呑山 2009)

- ①ファッション性重視による着脱の難しさ、着心地の悪さおよび装飾過多による事故の危険
- ②身体発達と衣服サイズの不一致による活動の妨げおよび事故の危険
- ③衣服素材による皮膚への影響
- ④衣服管理時の残留洗剤・ダニ・かび等の健康への影響

子どもの衣服の場合、体温調節および運動時の機能性も考慮した衣服選びが重要であり、この機能を満たした上でファッション性を考えるべきである。また、洗濯方法や保管方法なども考慮し、衣服が事故の発生要因とならぬようにする必要がある。

3-2. 食生活と関連して

3-2-1. 生活リズム管理と食育による食事時刻と食欲の確保

朝食抜きの問題と食の細さや偏食の問題が、多くの園長からあげられている。

朝食の欠食は、健康や成長の面からも心配される問題である上、日々の活動や心の安定に及ぼす影響も大きい。

幼児期の規則正しい生活リズムの大切さは後述の通りであり、起床、就寝とともに食事の時刻も定点として、1日の生活時間にすえることは、生活リズムの管理に有効である。

「少食で、外遊びは好きでなく、いつもママさんにまわりついているので『疲れる子』と言う印象を母さんは持っている」(室田 2001) という場合、概して「朝目覚めてくるのは9時半か10時」という状況が少なからずある。逆に、「子どもも早起きで、仕事に出かけるパパと一緒に食事をすまし、ご機嫌。朝のうちに公園でいっぱい遊ぶ。」となると、子どもは空腹のせいで昼食を積極的に摂り、適度の疲れのせいで昼寝もスムーズにできる。親が主導して、早め早めに1日の活動の展開に務めることによって、子どもの生活リズムを整えることができる。これは、子どもの心身の安定を導くことに加え、親自身にとっても子育てを楽にしてくれるものとなる。

このことは、子どもの生活より親の生活を優先させる家庭が増えている中、子どもに接する機会をあまり持たずに育てている、現代の中・高校生に、親業教育の1つの要として伝えていくことが大切であると考えられる。

また、子どもに食欲がないことが悩みとしてあげられる。次の2点を知っておくことが必要であろう。

①血糖値の変化を踏まえた食供与

ヒトの身体は、血糖値(血液中のブドウ糖濃度)が低くなると摂食中枢が反応して空腹を感じ、高くなると満腹中枢が反応して食欲が失せる。食事前に、たとえ少量でも、甘味の少ないものでも、飲み物であっても、摂取すると、食事が始まるころに身体はちょうど満腹感を感じることになる。子どもの食欲の確保のために、食事前の2時間は、水やお茶以外は与えないのが望ましい。

②達成感と次への意欲

子どもの小食を嘆く親は、食事の盛りが多すぎる場合が多い。それは、子どもへの過剰な期待を表しており、その後の子育ての中でも進化していくものとも言われる。

子どもにはむしろ少なめの量をつぐことを心がけ、食べ終える達成感を味わわせてやるのが大切である。食事時間も20分と決め、たとえ子どもが思うように食べていなくても、切り上げる。もっと食べることができる場合は、おかわりをさせてその意欲とともに喜び、次への意欲を育てればよいのだ。

少しの量で満足する子どもには、もともと小食

である場合と、魅力的なデザートやおやつがたくさん与えられるのでそちらでお腹を満たそうとする場合とが考えられる。後者は、デザートやおやつとの与え方を変えることが大切だ。

③家庭でできる食育を

嫌いな料理でも自分で作ったものは、不思議と食べられるものだ。嫌いな野菜でも、自分で育てたものは、子ども達も食べている。

このような「食育」と呼ばれる働きかけは、家庭でも行なうことができる。

3-2-2. 食事内容

朝食の内容については、おにぎりならまだよい方で、菓子パンやお菓子を与える家庭も見られるという実態が確認された。幼児の食事は一般に、洋風料理、一品料理が増えている。極端な野菜不足(禧須海 2009)であり、偏食・野菜嫌いが問題となっている。子どもだから洋食でもいい、肉はたくさん食べさせた方がよい、ということは、全く当てはまらないということを示し、親業教育では、観念だけでなく、具体的な食事を提案して伝えることが重要である。調理実習を伴うのであれば、食物学領域の中で関連させながら取り扱うこともできる。押さえるべき要素は次の5点であると考えられる。

①和食が基本

②主食は米飯、パンはおやつに

③目指す方向性は、一汁二菜(いちじゅうにさい)

④旬の野菜とだしの風味

⑤離乳食は、親の食事作りの過程で取り分けて、調味せずに仕上げる。

食事の基本は一汁三菜と言われるが、一汁二菜でも栄養バランスはとれているとされる。手をかけることが無理なら、朝食は一汁一菜でも充分と考える。

みそ汁には、野菜が何でも入れられて、豆腐を入れればみそとともにたんぱく質も摂取できる。みそ汁を大量にまとめて作り、調味する前の状態で冷蔵保存し、食べる分だけ取り分けて味噌を溶けば、楽にいつもおいしく食べられる。みそ汁づくりは、小学校家庭で学習するほど簡単な料理。みそ汁づくりさえ身につけておけば、あとはたいしたものなくても、満足できる食事になる。

おかずは、簡単なものでよい。朝、火を使わずに供することのできる納豆、のり、漬物、佃煮などは重宝する。

乳幼児期は、人生の中で最も味覚が鋭く、意外においしさがよくわかる時期である。味のよい、

品質の良いものを与えればよく食べる。できるだけ旬の野菜を用い、化学調味料の味でごまかさないうことも大切だ。

なお、調理実習の献立構成は、食事のイメージ形成に影響を及ぼすことから、1食分の形で実習することが大切である。

離乳食については、現代の親は次の2パターンに陥りがちである。作り方がわからずに、もしくは大変そうで困難に感じてベビーフードだけに頼る親。ガチガチに肩に力を入れて一生懸命に作り、その結果育児で疲弊するとともに、子どもへの強制力を日常的に発動してしまう親。せっかく苦労して作ったのだから、「しっかり食べなさい」となるのだ。

現代の若者の調理技術と知識から考えると、高等学校家庭科において、おとなの食事から取り分けて作る調理実習の実施が必要である。これは、簡単であり、また将来的に生活習慣病になりにくい身体的基础作りができ、かつ親にとっても食事改善によるメタボ防止にもつながり、地域社会からの要望も高い、一石何鳥にもなる、価値ある実習であると考えられる。

著者らが取組んでいる、地域における「食事づくり教室」に参加した母親たちは、旬の野菜をふんだんに含んだ和食の食事を作ることになったことで、子どもが以前の倍くらい野菜をよく食べるようになった(秋永 2008)と述べている。

3-2-3. 本当に必要か、確かめるということ

例えば、赤ちゃん用イオン飲料は、それを与えなければいけないと思っている親が増えている。産婦人科退院時にプレゼントされるそうだ。それが本当に必要なものかどうか、自分で確かめるという態度を、親業教育に位置付けたい。

①自分の舌で確かめること。親は子ども用のものを意外と味見していない。必ず一度は、自分の口に含んでみよう。赤ちゃん用イオン飲料を一口味わったママたちは、一様に、そのまずさと甘さに驚く。

②自分の目で確かめること。

最近では、どのくらいの糖分が入っているのか、表示をみると簡単にわかるようになっている。赤ちゃん用イオン飲料でも、一般のイオン飲料と糖分含量は変わらないということ、自分の目で確認することは大切だ。

③自分の思考を働かせること。

赤ちゃん用イオン飲料が配られるのは、企業の宣伝のためであり、子どもにとって必要だからで

はないということに気づかせてあげる場が必要な時代となっている。離乳前から湯ざましやお茶がわりに与え、「赤ちゃんが離乳食を食べようとしないう」と悩む親が増えている。さらには、一歳になる頃には糖尿病の心配を抱えて市町村の保健課や薬局の栄養士に相談に来る例が増えており、深刻な問題となりつつある。家計の負担も見逃せないレベルであろう。改めて立ち止まって考えてみるという視点を持つことも必要だ。

④先輩や地域の力を借りよう

自分で判断できなくなった時は、先輩ママや、地域の保健師、栄養士に、気軽に相談したらよいということも知らせておきたい。

3-3. 生活時間、メディア、人と関わる力と関連して

3-3-1. 就寝とメディア視聴

「早寝・早起き・朝ごはん」の定着を進めるためには、乳幼児の生活を前提として捉え、理解することが重要である。例えば、昨今の子どもの外遊びの減少し、ゲームやカード等による室内遊びが増加しこれに伴い、運動不足がおこり、それ所以にしっかりと空腹を感じ、疲れて早く寝ることが困難となっている。外で良く遊ぶことが生活全体のバランスを整え子どもの健やかな発達を促すことも指摘されている(吉田 2009)。しかし、本調査でも、子どもの就寝時間が遅く、睡眠不足の子どもが多く、0歳児でも24時間近くになる子どもがいるとの指摘がある。保護者を対象とした調査では、わかりにくいこういった現実をしなければならないと考える。

園長等の調査からは、メディアとのかかわりについてはかなり深刻にその課題が指摘されている。例えば、DVDやビデオづけであり、良くテレビを見ていること、携帯電話も利用している。生活の中のメディアの氾濫は、昨今「デジタル・ネイティブ」と言われるとおり、生活形態の変化による点も多い。メディアを活用する力を全く否定するわけではないが、先に挙げた基本的な生活習慣を形成するために、「早寝・早起き・朝ごはん」には、外遊びが必要であり、メディアがその機会を減少させているとしたら、子どもの発達に問題を与えることが危惧される。

さらに問題であると思われることは、テレビやビデオ等のメディアを子育ての代替として、つまり、「子守」として活用し、親子が直接触れあひ会話する機会を減少させてしまうことである。家庭科保育分野においては、家庭の機能や幼児期に

重要なことといった理念に加えて、子どもの発達に関する知識とともに、子どもとの関わり方、接し方、しかり方、といった技術そしてそれが実際に活用できるような力を育む必要がある。

3-3-3. 人と関わる力と関連して

園長等保育者対象の調査から、親子の人間関係の希薄化、親自身の人と関わる力の低下が指摘されている。特に親の社会性の低さは、子どもの社会性の低さに繋がるものであり、そのことを家庭科保育分野で周知する必要があると考える。昨今の脳研究の成果からも、人が人から多くを学ぶこと、親子の相互作用が子どもの発達に重要な影響を与えることが指摘されている。

保育者対象の調査で「小・中・高等学校の家庭科の親業教育において必要だと思うことについて」指摘されていたことは、「命の尊厳」「愛すること」「命の大切さ」「自尊感情が芽生えるような教育」「愛情」といったことが指摘されていることに注目したい。これらはきわめて基本的なことと思われがちだが、その欠落が深刻であることが多くの保育現場から警告されている。

家庭科教師に期待されていることには、自らが生き方の手本を示すことや、「心」の教育を担うこと、子育ての現状を知った上でのより実践的な教育が期待されていた。子どもを愛し、社会の中で人と関わりながら子育てをする力を家庭科教育における親業教育において推進されることが今後益々期待されると考える。

4. おわりに

つい半世紀前まで日本人の生活は、家族、親族、地域社会の中で営まれ、命を守る様々な技術や様式が生活文化として伝えられてきた。この50年の核家族化や地域消失の過程で我々が最も失った生活文化は子育ての文化である。子孫の育て方が分からない、尋ねる人もいないという状況は、生物学的にも社会的にも極めて危機的であると思われる。それ故、今日、学校教育の果たす役割は大きいといえる。

家庭科は、人間の一生を連続的に捉え、発達段階ごとに身につけるべき生活スキルを獲得させる教科である。今後、家庭科教師の養成教育において、本研究で明らかになった現代の乳幼児の生活課題を踏まえ、それらに対応した衣生活、食生活、生活時間などを軸とする親業教育が実践できるよう、「保育」の教育内容を再構成する必要があると考える。

参考・引用文献

- 秋永優子 (2008) 「宗像市民による未就学児童の保護者に対する食教育講習会プログラムに関する研究」『平成 18, 19 年度福岡教育大学年度計画研究プロジェクト報告書』。
- 天富美禰子・加藤直子 (1999) 「小・中学校における家庭科保育領域の指導の変遷—「性と生命」の教育への課題—」『大阪教育大学紀要』第 II 部門 第 48 巻 第 1 号 1-12 頁。
- 伊藤葉子 (2003) 「保育教育の変遷と親性準備性」『千葉大学教育学部紀要』第 51 巻 147-154 頁。
- 伊藤葉子 (2007) 「中・高校生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討」『日本家政学会誌』58 巻 6 号 315-326 頁。
- 糟須海圭子 (2009) 「幼稚園保護者を対象とする食育の試み」『平成 21 年度福岡教育大学修士論文中間発表会要旨』。
- 北野幸子 (2005) 「プレ子育て支援としての家庭科「保育」教育構想：課題検討を中心に」日本家政学会『研究発表要旨集』73 頁。
- 斉藤秀子・呑山委佐子 (2009) 「快適服の時代—ヒト・衣服・環境 25 話—」(株)おうふう 162-163 頁。
- 柴 静子・一ノ瀬孝恵・日浦美智代・藤井志保・鈴木明子 (2005) 「家庭科の保育領域におけるふれ合い体験学習の効果に関する研究」『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』33 号 369-379 頁。
- 中央教育審議会 (2005) 「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について—子どもの最善の利益のために幼児教育を考える— (答申)」。
- 中村喜美子・松本優子 (1998) 「中学校技術・家庭科保育領域におけるふれあい体験学習」『愛知教育大学家政学教室研究紀要』No.29 11-21 頁。
- 福岡教育大学家政教育講座 (2009) 『家庭科授業のための実験・実習・演習ハンドブック』。
- 藤後悦子 (2004) 「青年期を対象としたペアレンティング教育の導入—アメリカのペアレンティングプログラムの例—」『日本家庭科教育学会誌』47 巻 3 号 248-253 頁。
- Benesse 教育研究開発センター (2007) 『第 3 回幼児の生活アンケート報告書・国内調査 乳幼児をもつ保護者を対象に』ベネッセ。
- 室田洋子 (2001) 「おとなは子どもとどう関わるか」『食べもの文化』第 286 号 芽ばえ社 68-71 頁。

吉田伊津美 (2009) 「運動遊びと健康づくり」「生活の中の運動習慣」「総合的活動としての運動遊び」 北野幸子・角尾和子・荒木紫乃編著『遊び・生活・学びを培う教育保育の方法と技術』北大路書房32-36, 59-63, 77-81頁.

付記

本研究は、平成21年度特別教育研究事業「「生きる力」につながる「ものづくり力の育成」と「生活の自立」をめざした教材開発・活用プログラム」の事業内容「「生きる力」に関わる教育現場のニーズ調査」の一貫として実施した。調査の趣旨に賛同していただき、家庭での親の子育ての実態についての課題を共に考えてくださった、先生方に心より感謝する。